

つくり
育てる漁業
人と技術の
ネットワーク

ACN 特定
非営利
活動法人
REPORT
NO.45 2016.OCT.
AQUACULTURE NETWORK

ACNレポート
第45号 併設

ACN養殖用種苗生産速報(年計) 2015年9月1日～2016年8月31日

1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

養殖用種苗数 4,443万尾(昨年4,505万尾比 1.4%減)

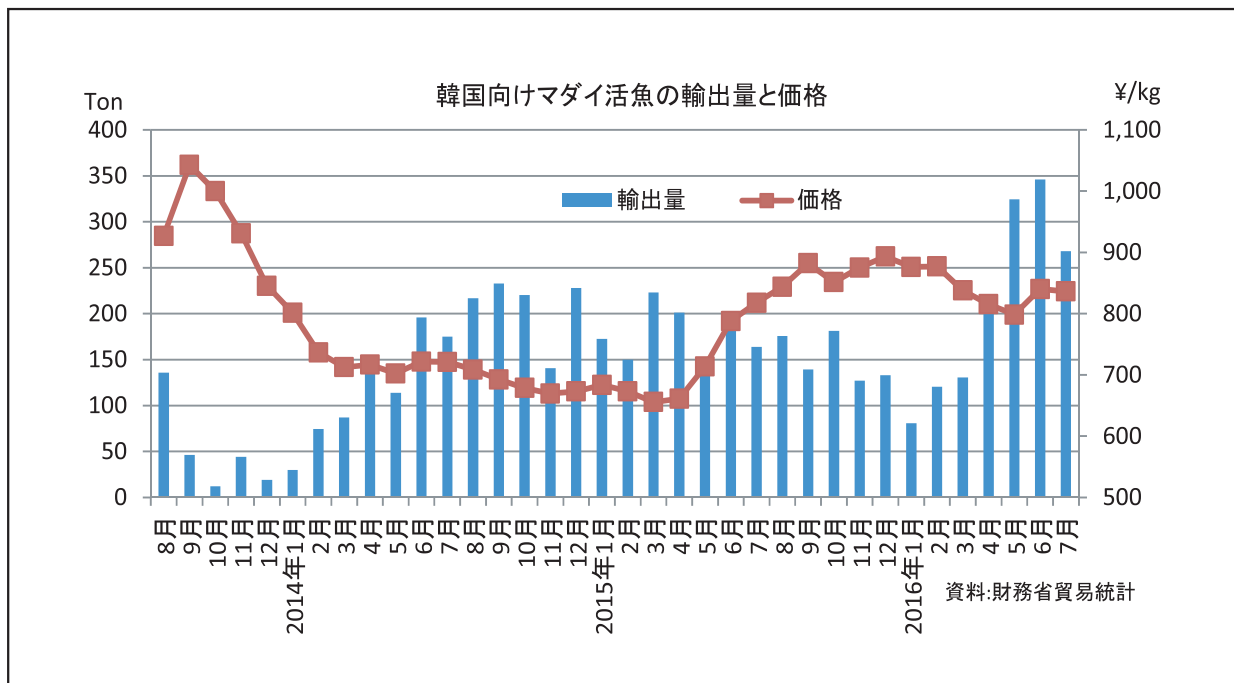
2015年9月～2016年8月のマダイ養殖用種苗数は、近畿大学、山崎技研、ヨンキュウなど18社で4,443万尾となり、前年比1.4%の微減で、3年連続の減少となった。夏越し種苗数は640万尾で昨年同数となったが、今夏の高水温やイリドウィルスによる減耗が危惧される場所である。種苗価格については、10cm前後サイズを主体に、およそ8～9円/cmで推移した。

マダイ成魚価格が堅調に推移しているにも拘わらず、養殖用種苗数は減少を続け、マダイ生産者の種苗導入意欲は高くない状態にある。この要因として

は、成魚価格が好調でも、飼料コストが上昇しているため、利益増には繋がり難いことが考えられる。

他方、明るいニュースとしては、韓国向け輸出の増加が挙げられる。下図は、韓国向けマダイ活魚の3年間の輸出数量と、FOB価格(消費税抜き商品代+輸出通関諸費用)の月別推移を示したものである。直近3カ月間(2016年5月～7月)の輸出量は938トンで、前年同期間の499トンに比べ188%と増加しており、価格も1年間は堅調に推移している。

このような状況下でマダイ在池数量は減少しており、来期ではマダイ養殖用種苗数の増加が予測される。



2. トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

養殖用種苗数 880万尾 (昨年772万尾比 14.0%増)

2015年9月下旬から出荷が始まったトラフグの成品では、浜値は当初4,000円/kgの高値を付けたが、そ

の後は価格が2,600円/kgまで下落したため、見通しの難しい中での種苗生産の準備となった。しかし、2015年末から成魚価格が3,000円/kgまで戻り、2016年2月からは一段と上昇したため、種苗の引き合いも

活発になり、一部の種苗生産者は3月上旬には受注を打ち止めしたようである。種苗生産準備段階ではこのような状況が予想されなかったため、2015年9月～2016年8月の種苗数は、**長崎種苗、金子産業、大島水産種苗**など昨年同数の16社(民間 13社・公的 3事業場)で880万尾となり、前年比14%増に留まった。

採卵用親魚は、養殖場からの高成長選抜個体が主流で、各社とも年末より準備に入り、2月中旬までには池入れを完了した。飼育面では変形魚や大量斃死の報告はなく、順調なシーズンであったと思われる。

3月中旬～4月の早期種苗は①加温設備のある陸上養殖場 ②シュードカリグス・フグの寄生回避 ③当歳魚出荷を計画している海面養殖場に例年並みに出荷された。加えて、シュードカリグス・フグの寄生

終息後となる7月出荷の8cmUP種苗の注文もあった大分県では、4月下旬から断続的に発生した赤潮でヒラメやトラフグに被害が出たが、ヒラメ種苗がなくトラフグ種苗に切り替えたため、導入数は前年より増加している模様である。

販売価格は6cmUP・95円～105円/尾、7.5cmUP・110円～115円であった。歯切り種苗の注文は増加しており、追加費用は10円～13円/尾であった。全雄種苗は前年同様3社で生産されたが、養殖生産者からの注文は低調であった。その要因としては、2015年末に出荷された成魚は相場より高く取引されたが、成長が遅いことや、白子の大小差があること、成魚までの生残率が低いことなどが挙げられる。

3. ヒラメ 平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目

養殖用種苗数 502万尾 (昨年480万尾比 4.6%増)

2015年9月～2016年8月のヒラメ養殖用種苗数は、**まる阿水産、マリンテック、長崎種苗**など14社(民間11社・公的3事業場)で502万尾と、前年比4.6%増となった。2015年9月のACNレポート43号では、種苗数を450万尾と記載していたが、今回の聞き取り調査で、生産者の昨年の数量を30万尾少なく計上していたことが判明したため、480万尾に訂正した。これは、当方の不手際であり、読者の皆様にお詫び申し上げます。

ここ数年にわたって、放流用ヒラメ種苗生産に甚大な被害をもたらしているアクアレオウイルス感染

症が、今シーズンは養殖用を生産している民間種苗場で発生した。そのため、種苗数の減少が予想されたが、4月以降から生産は復調し、8月までに種苗を出荷したため、結果的には種苗数は増加となった。販売価格は例年並みの8cmUP、90円/尾であった。

韓国産ヒラメの主産地の済州道では、クドア問題のため30社が日本向け出荷を停止しているため、輸入価格は、2015年8月の1,356円/kgが、9月には1,644円/kgへと21%急騰した。

このように韓国からの輸入量が減少していることや、国内では赤潮被害や慢性的な疾病による減耗で在池数量も少ないので、今後の種苗需要は高まると予想される。

4. シマアジ 縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆縞鯆

養殖用種苗数 420万尾 (昨年390万尾比 7.7%増)

2015年9月～2016年8月のシマアジ養殖用種苗数は、**近畿大学、山崎技研**など5社(民間2社・公的3事業場)420万尾と、前年比7.7%増加した。販売価格は全長9～10cm、170円/尾であった。

昨年同様に成魚相場が安定しているため種苗導入意欲は高く、2014年の250万尾から2年間で420万尾(68%)と急増している。しかしながら、刺身食材でしかも高級魚であるシマアジ需要のさらなる急増は考えにくく、今後の種苗需要には留意しておく必要がある。

1. マダイ 真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛真鯛

2015年は、魚粉価格高騰による春の飼料価格大幅値上げを受け、飼料コストの削減のために制限給餌で育成する傾向が強まった。また、四国西部では、深刻な被害をもたらす赤潮(カレニア・ミキモトイ)が6月上旬から発生し、終息するまで約2ヶ月間を要したため、餌止め期間も長期化した。これらの影響で成長は低迷し、出荷できるサイズ、尾数、漁場は制限され、特に1.5kg以上の大サイズの不足状況が続いた。9月のマダイ浜値は800円/kg前後まで上昇し、その後年末にかけても大サイズは800円/kg以上を維持した。2016年の年明け以降、浜値は一時軟調に推移したが、4月から韓国向け輸出が増加し、再び上昇に転じている。韓国向け出荷サイズも従来の2kgUPサイズから1.5～2.0kgサイズが主流となり、大サイズが不足する中でも輸出量は増加している。

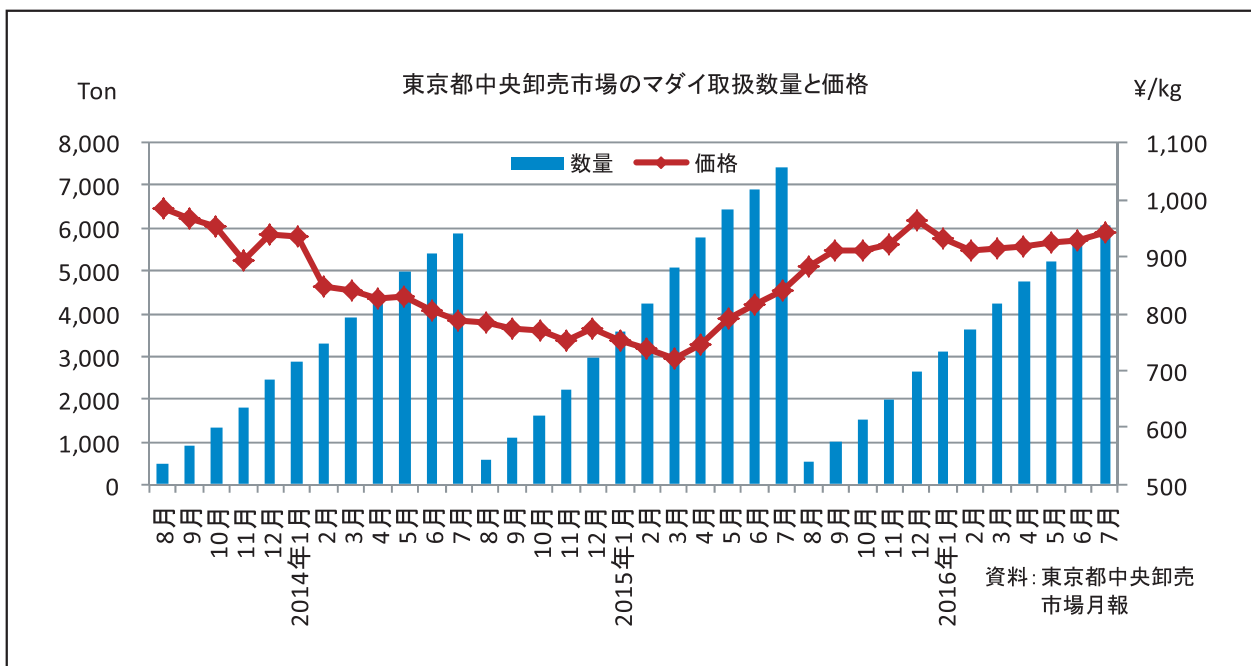
2016年夏は、赤潮被害が少なかったものの、猛暑の影響で例年よりも水温上昇が著しく、高水温期も長期化したことから、摂餌低下や成長停滞を引き起

こした。そのため、1kg前後の小サイズも減少したが、1.5kgUPの800～830円/kgに引っ張られ、小サイズの相場も780円/kg前後まで上昇してきている。全体的に在池数が少ないことから、成魚価格は今後も堅調に推移するものと思われる。

疾病状況は、主産地の四国西部以外でもエドワジェラ・タルダ症に加えてイリドウイルス症、連鎖球菌症が増加している模様で、被害の拡大が懸念される。

2015年のマダイ養殖収穫量は、農林水産省統計では63,800トンで前年(61,700トン)より微増している。

下図は、東京都中央卸売市場(全市場)における養殖マダイ鮮魚の取扱い累計数量と月別価格(消費税込)について、直近データの2016年7月を基準に、3年分を示したものである。2015年8月～2016年7月の年間取扱量は6,057トンであり、前年同期間の7,436トンと比べて81.5%と減少し、価格は堅調に推移している。



2.トラフグ 虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚虎河豚

2015年のトラフグ商戦は9月下旬より始まり、品薄状態のため10月には、浜値は対前年同期2倍の4,000円/kgの高値となった。しかし、相場高で荷動きが停滞し、10月末には3,500円/kgとなり、さらなる下落を危惧した生産者が800gサイズを大量に出荷した事もあり、11月末には2,600円/kgまで下落した。12月に入ると3,000~3,200円/kgまで戻し、年末には各産地とも在池尾数が減少していたが、天然物の水揚げ増のため、2016年2月末までは海面物3,200円/kg・陸上物3,500円/kgで推移した。しかし、3月に入ると、京都・大阪などで海外観光客のトラフグの爆食などもあり需要が増大し、浜値は3,500~3,800円/kgとなり、4月には4,000円/kg、5月には5,000円/kgまで上昇した。一般的にトラフグ相場は年明け後には軟調になるが、今シーズンは例外であった。品薄のため市場からは強い出荷要請があり、生産者にとっては、年内の出荷か、それとも年明けの相場高に賭けてみるか、難しい選択を迫られたシーズンであった。

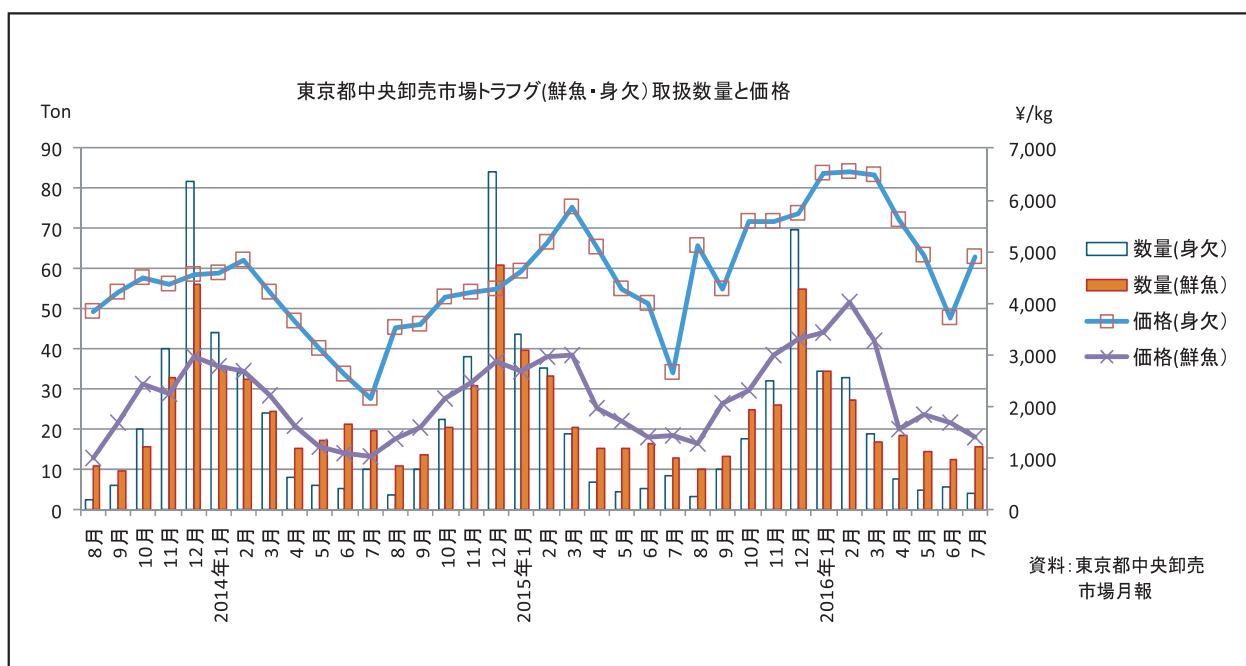
このような価格の急上昇は、海面物の歩留まりの低下による減産で、需給バランスが崩れたことに起因する。長崎県では、低水温障害と思われる原因不明の斃死や、低魚粉飼料の使用が増加したことや、エラ虫症や赤潮の発生に対応した餌止めによる成長不足が重なった模様である。その他、口白症と思われる被害も散見された。

また、大分県では、4月から7月まで断続的に発生した赤潮により、当歳魚、2歳魚の斃死や給餌制限での成長の遅れがみられる。愛媛県では、黄疸症(肝機能障害)で2年魚の斃死も見受けられ、高水温時の飼育管理技術の向上が求められている。

みなと新聞によれば、中国からの輸入量は2015年には約600トン、2016年は約800トンに増加するとの情報もある。一方で、中国国内ではふぐ食解禁や日本産の輸入許可に向けた活動も聞かれ、今後の動向に注視したい。

2015年のフグ類養殖収穫量は、農林水産省統計では3,800トンで前年の4,900トン比で22.4%減少している。

下図は、直近3年間の東京都中央卸売市場(全市場)における「生鮮」と「身欠^{みがき}」トラフグの月別取扱数量と価格を示したものである。需要の大きい冬季には「身欠」が増加し、夏季は「生鮮」が増加し、身欠と生鮮の価格差は年々大きくなる傾向にある。3年間の合計取扱数量と価格は、鮮魚が1,009トンと2,386円/kg、身欠きが926トンと4,789円/kgであり、「身欠」の価格は「生鮮」の2倍である。一般的に「身欠」の歩留まりは60%と言われており、加工包装費用を考慮するとこの価格差は妥当であり、需要期には調理手間の省ける「身欠」が増加しているものと思われる。



3. ヒラメ 平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目平目

2015年夏からヒラメ浜値は上昇し、800gサイズ1,600～1,700円/kg、キロ物で1,700～1,800円/kgで推移し、2016年2月以降は各サイズとも100～200円/kg下がったものの、6月以降は持ち直している。年間を通して相場は堅調であったが、それ以上にトラフグ相場が好調なため、大分県の陸上養殖場ではトラフグ種苗導入数を増加した模様である。

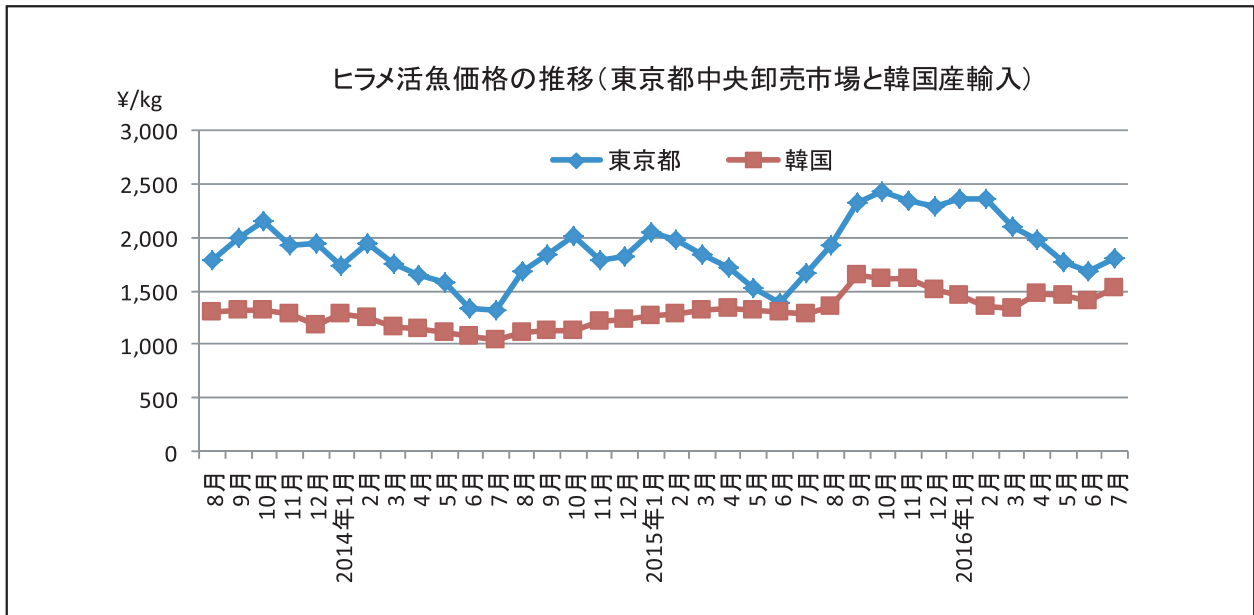
成育状況では、大分県では、2016年4月下旬から7月にかけて断続的に発生した赤潮（カレンニア・ミキモトイ）による斃死や給餌制限があり、他の地域でも夏場の高水温下での給餌制限で一般的に成長が遅れた。

疾病の発生状況については、エドワジェラ・タル

ダ症は例年のように発生し、8月の異常な高水温が原因と見られる斃死が発生した養殖場もあった。

農林水産省統計では、2015年のヒラメ養殖収獲量は2,500トンで前年（2,600トン）比96.2%と減少している。

下図は、直近3年間の東京都中央卸売市場(全市場)と韓国産輸入のヒラメ活魚価格の推移を示したものである。東京都中央卸売市場の価格は天然物と養殖物(国産+韓国産)を合算した消費税込で、韓国産はCIF価格（商品代+運賃+保険）で消費税抜きである。両者の価格差の最大幅は2016年2月のキロ当たり993円であった。



資料：東京都中央卸売市場月報、財務省貿易統計

4. ブリ・ハマチ 鰺・鰯 鰺・鰯 鰺・鰯 鰺・鰯 鰺・鰯 鰺・鰯 鰺・鰯 鰺・鰯

2016年シーズンの天然種苗は全般的に豊漁で、モジャコのサイズも大き目で、2～3日で必要尾数が確保できた地域もあったが、解禁が遅い長崎エリアでは、想定より早くモジャコが北上した模様で、必要尾数を採捕できなかった。

全採捕尾数は昨年並みかやや少ない約1,600万尾であった。モジャコサイズが大きかったためか、ワク

チン接種時に処分されるベコ病罹魚の割合は、1割以下の地域もあったが、全体的には昨年とあまり変わらなかった模様である。大分県では、赤潮発生で給餌不足のため、例年よりもやや小さなモジャコで養殖を開始した。

浜相場は、3年魚の在池尾数が少なめで、産地も限定的であったため、初夏の段階では強含みで、4kgUP

サイズがポータル積800円/kg程度であった。しかし、今夏の4kgUPサイズは、切り身商材として使用され荷動きは鈍く、刺身商材は血合の変化が小さく、肉質の評価が上がってきている新物に切り替わっている。

しかしながら、新物も例年ほど出荷が進まず、秋以降の在池量の増加は確定的で、現在ポータル積700円後半/kgの浜相場も年末には600円台/kgに落ち込む可能性がある。

5. カンパチ 間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八間八

2015年ではカンパチ稚魚および中間魚は550万尾が導入されたが、2016年は、稚魚が500万尾、中間魚が200万尾の計700万尾で、九州では450万尾が導入された模様である。更に、中国から中間魚が100万尾導入されるといわれる情報もあり、合計すると800万尾になる。このような増加の背景としては、昨年、今年と全国のもじゃこ導入尾数が少ないことが考えられる。

浜相場は、2015年の1,100～1,150円/kg程度から今年は少し下げて1,050～1,100円/kgで推移している。

但し、カンパチは夏場がシーズンであるが、ハマチの新物に市場が奪われ荷動きは非常に鈍く、今後の浜相場は弱含みで推移するものと思われ、1,000円/kg以下になる可能性もある。

鹿児島県の錦江湾では2011年から人工種苗が導入されていたが、補助金の終了で今年の導入は行われなかった。人工種苗の技術は今後必要となるものであり、途切れることは非常に残念である。

6. ヒラマサ 平政

前報では、中国での種苗採捕尾数が少ない年の翌年は国内採捕も少ない傾向にあると報告したが、ふたを開けてみれば国内は豊漁で、必要尾数（国内需要100万尾）が確保できた模様である。ヒラマサ種苗が例年よりも早く中国の採捕エリアから移動したという可能性が高そうである。

浜相場は1,000～1,050円/kgと2015年同様の相場です。

推移している。他の青物も相場上昇の気配がないことから、良くても現状維持と思われる。

生餌用のカタクチイワシの8月の単価は50円/kg以上と高値で推移しており、離島の生産者にとっては、飼餌料価格の上昇に加えて海上輸送費等も掛かるが、成魚価格への転嫁が困難であり、収益面で厳しい状況にある。

7. シマアジ 縞鯯

シマアジ浜相場は、2012年に底を打ち、2015年は1,500円/kgに回復し、2016年も多少の変動はあるものの1,450～1,500円/kgで推移している。

今年も九州方面でのシマアジ種苗の需要が意欲的

で、昨年以上に導入尾数が増えている。但し、導入が増えた2015年の種苗は、2017年春以降には成魚出荷され、以後の浜相場が懸念されるところである。

